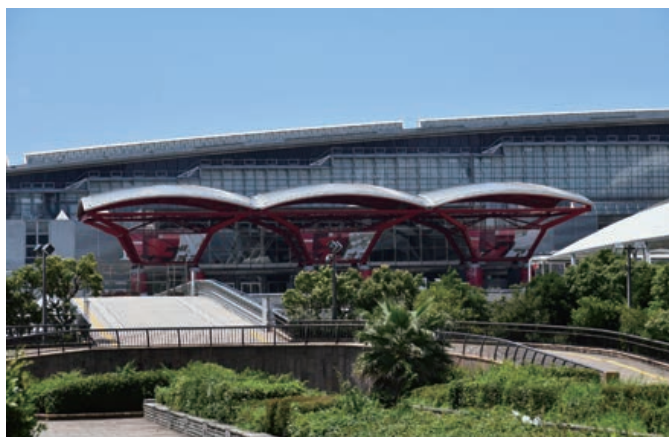


# 東京2020パラリンピック競技大会・千葉県内開催競技と千葉県ゆかりの選手の活躍

## 1

## 千葉県内開催競技

千葉県内では、東京2020パラリンピック競技大会において、8月25日から9月5日までの12日間に、幕張メッセ（千葉市）で、ゴールボール、シッティングバレーボール、テコンドー、車いすフェンシングの4競技が実施された。



幕張メッセ



シッティングバレーボール



ゴールボール



テコンドー

## ◎ゴールボール

幕張メッセCホール（イベントホール）  
2021年8月25日（水）～9月3日（金）

## ◎シッティングバレーボール

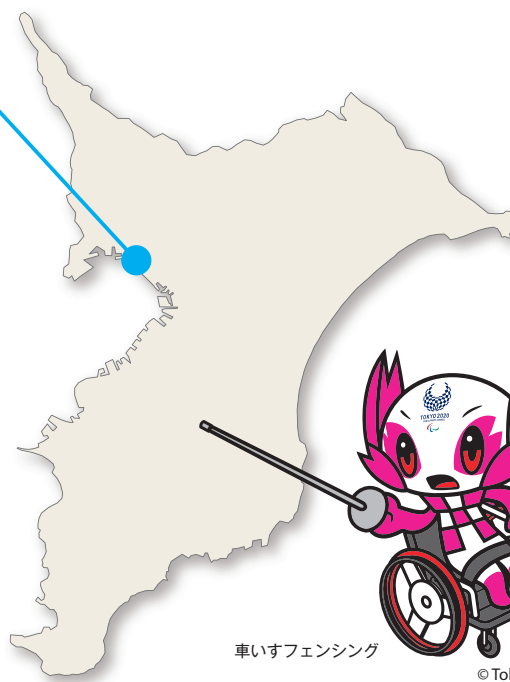
幕張メッセAホール（国際展示場1～8ホール）  
2021年8月27日（金）～9月5日（日）

## ◎テコンドー

幕張メッセBホール（国際展示場9～11ホール）  
2021年9月2日（木）～9月4日（土）

## ◎車いすフェンシング

幕張メッセBホール（国際展示場9～11ホール）  
2021年8月25日（水）～8月29日（日）



車いすフェンシング

© Tokyo 2020



女子3位決定戦でブラジルと戦う日本代表 奥側左から萩原紀佳選手、高橋利恵子選手、欠端瑛子選手  
Photo by Tokyo 2020/Kenta Harada



## ゴールボール

8月25日から9月3日までの10日間、幕張メッセCホールでゴールボールが実施され、男女各10チームが参加した。

ゴールボールでは、1チーム3人がアイシェード（目隠し）を着け、相手方ゴールを狙って交互にボールを投げ合い、前後半各12分での合計得点を競い合う。攻撃側は、音が鳴る鈴入りのボールを、転がしたりバウンドやカーブさせたりしてゴールを狙い、守備側は、ボールの鈴の音や相手の足音を聞き分け、ボールが来る方向を判断して体全体で防御する。競技者全員がアイシェードを着用するので、障害の程度にかかわらず条件が平等となり、3人のチームワークや相手をかき乱させる駆け引きなどが勝敗を左右する。

2012年のロンドン大会以来、2大会ぶり2度目の金メダル獲得を目指す女子代表チームは、予選リ

ーグを2勝1敗1分け、グループ3位で突破した。続く決勝トーナメントでは、準々決勝でイスラエルに勝利し、準決勝でトルコに敗退したものの、3位決定戦でブラジルを破って、銅メダルを獲得した。なお、トルコが金メダルとなった。

世界ランキング10位の男子代表チームは、予選リーグで、アルジェリアに快勝し、2016年のリオデジャネイロ大会銀メダルのアメリカ、金メダルのリトアニアを撃破。世界ランキング1位で今大会の金メダルを獲得したブラジルには敗れたが、予選リーグを3勝1敗、グループ1位で突破した。決勝トーナメントでは準々決勝で中国に敗れ5位入賞となった。

日本代表チームは男女とも6人で構成され、男子代表チームのメンバーとして、印西市にある順天堂大学在籍の佐野優人選手が<sup>さのゆうと</sup>出場した。





女子3位決定戦  
背番号7が高橋選手、3が欠端選手

Photo by Tokyo 2020/Kenta Harada



男子準々決勝でボールを止める佐野選手

©森田直樹/アフロスポーツ



ゴールボール日本代表 後列左から5番目が佐野選手

©YUTAKA/アフロスポーツ



ゴールボール会場

©森田直樹/アフロスポーツ



男子7-8位決定戦に臨む男子代表

© 西村尚己/アフロスポーツ



## シッティングバレーボール

8月27日から9月5日までの10日間、幕張メッセAホールでシッティングバレーボールが実施され、男女各8チームが参加した。

シッティングバレーボールは、下肢などに障害がある選手が床にお尻を着けて、座った状態でプレーする6人制のパラリンピック競技。ボールの大きさや基本的なルールはオリンピックのバレーボールと同じだが、コートがひと回り狭く、ネットも低く設定されている。障害の程度が軽い選手の出場はコート上で1人のみで、ボールに触れる際にはお尻の一部が床に着いていないと反則となるなどのルールがある。

日本チームは男女とも開催国枠で出場。男子代表チームは、予選リーグで、ロシアパラリンピック委員会、エジプト、ボスニア・ヘルツェゴビナと対戦

し、0勝3敗で決勝トーナメントの進出を逃した。女子代表チームは、予選リーグで、イタリア、ブラジル、カナダと対戦。0勝3敗という結果であった。最終的に男女とも7-8位決定戦で敗れたため、8位となった。

男子代表チームは12人で構成され、千葉県障害者スポーツ・レクリエーションセンター（千葉市）を練習拠点とするチームから、加藤昌彦選手（松戸市出身）、田澤隼選手、皆川鉄雄選手の3人が出場した。

また、女子代表チームは9人で構成され、館山市出身の長田まみ子選手が出場した。

なお、大会では、身長246cmの選手を擁する男子のイランが話題を集め、そのイランが金メダルを獲得。女子は、アメリカが金メダルという結果となった。





シッティングバレーボール男子代表 背番号3が加藤選手、4が皆川選手、6が田澤選手

©長瀬友哉/フォート・キシモト



シッティングバレーボール女子代表 背番号10が長田選手

©森田直樹/アフロスポーツ



シッティングバレーボール会場

©ロイター/アフロ



男子75kg級敗者復活戦1回戦で戦う工藤選手  
Photo by Tokyo 2020/Kenta Harada



## テコンドー

9月2日から4日までの3日間、東京2020大会から正式競技として採用されたパラリンピックのテコンドーが、幕張メッセBホールで実施された。

パラリンピックのテコンドーには、主に上肢障害の選手が行うキョルギ（組手）と、知的障害や視覚障害、下肢障害の選手が行うpumse（型）の2種類がある。東京2020大会ではキョルギが採用され、通常は障害の程度で4階級に分かれるところ、障害の程度が軽い2つの階級を統合した形で男女とも3階級に分かれて競技が行われた。

八角形のコートや身に着ける防具などはオリンピックのテコンドーと同じで、胴部への攻撃のみが有効となるのは、パラリンピックならではのルールであり、突き技は得点とならず、頭部への攻撃は禁止されている。

日本代表では、国内選考を勝ち抜いた、<sup>たなかみつや</sup>田中光哉

選手（男子61kg級）、<sup>くどうしゅんすけ</sup>工藤俊介選手（男子75kg級）、<sup>おおたしやうこ</sup>太田渉子選手（女子58kg超級）の3選手が出場した。

初日の男子61kg級には、田中選手が登場し、初戦と敗者復活戦1回戦で敗れ9位となった。翌日の男子75kg級に登場した工藤選手は初戦で敗れたが、敗者復活戦1回戦でセネガルの選手に勝利。敗者復活戦2回戦で敗れ7位となった。

最終日には、女子58kg超級に太田選手が出場した。太田選手は冬季パラリンピックの2006年トリノ大会バイアスロンで銅メダル、2010年のバンクーバー大会ではクロスカントリースキーで銀メダルを獲得し、2014年のソチ大会の開会式では旗手を務めている。初めての出場となった夏季大会では初戦で敗れ、敗者復活戦1回戦は対戦相手の棄権による勝利。同2回戦で敗退して7位となった。





女子58kg超級敗者復活戦2回戦で戦う太田選手

© YUTAKA / アフロスポーツ



テコンドー会場

© YUTAKA / アフロスポーツ



男子61kg級で戦う田中選手

© SportsPressJP / アフロ



男子サーブル個人（カテゴリー B）で戦う恩田選手（左）  
© AP / アフロ



## 車いすフェンシング

8月25日から29日までの5日間、幕張メッセ B ホールで、車いすフェンシングが実施された。

車いすフェンシングは、ピストと呼ばれる台に車いすを固定して戦う競技で、オリンピックのフェンシングと同様、胴体だけを突く「フルーレ」、上半身全体の突きを行う「エペ」、上半身全体の突きに斬る動作が加わる「サーブル」の3種目がある。また、メタルジャケットや剣などの基本用具やルールもほぼオリンピック競技と同様となる。

3種目ともそれぞれ障害の種類や程度によって、カテゴリー A・B の2つのクラスに分かれ、障害の程度は、カテゴリー A が軽度、カテゴリー B が重度のクラスになる。今大会には、日本代表として男子3人、女子3人の6人が出場した。

女子個人種目では、阿部知里選手（カテゴリー B）がフルーレとサーブルに、櫻井杏理選手（カテゴリー

ー B）と聖徳大学短期大学部を卒業した松本美恵子選手（カテゴリー A）がフルーレとエペに出場した。世界ランキング6位の櫻井選手が女子エペ個人において予選リーグを4勝2敗で通過し、決勝トーナメントに進出。準々決勝では世界ランク1位のビクトリア・ボイコワ選手（ロシアパラリンピック委員会）に敗れたが、6位入賞を果たした。櫻井選手のフルーレと他の選手は予選リーグでの敗退となった。

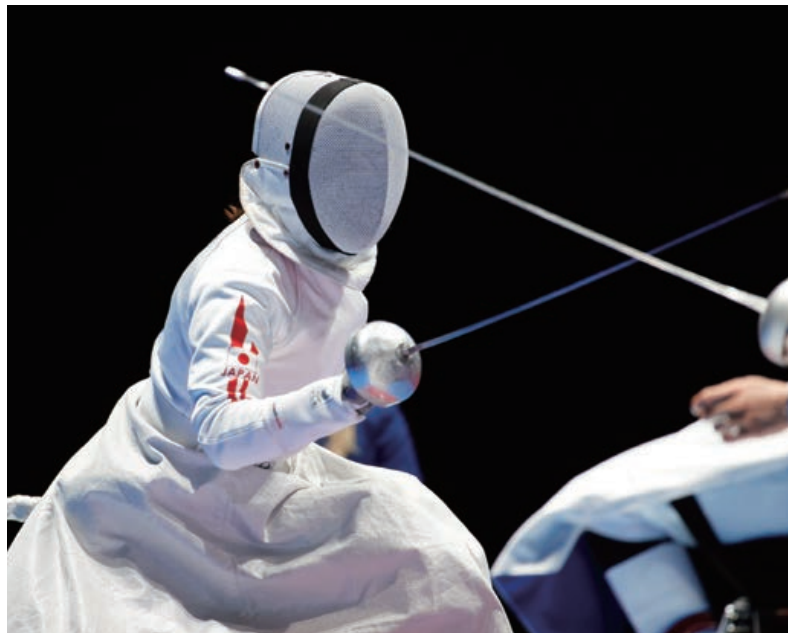
男子個人種目では、恩田竜二選手（カテゴリー B）と加納慎太郎選手（カテゴリー A）がフルーレとサーブルに、藤田道宣選手（カテゴリー B）がフルーレとエペに出場したが、いずれも予選リーグ突破はなかった。

また団体戦では、男子がフルーレ団体（恩田選手、加納選手、藤田選手）に出場し、予選リーグで敗退、女子は選手の負傷によりエペ団体が棄権となった。





女子エペ個人  
(カテゴリー A) に出場した松本選手 (写真上、右)  
©長瀬友哉/フォート・キシモト



©長瀬友哉/フォート・キシモト



女子エペ個人 (カテゴリー B) で6位に入賞した櫻井選手

©ロイター/アフロ



車いすフェンシング会場

Photo by Tokyo 2020/Kenta Harada

東京2020パラリンピック競技大会には、千葉県にゆかりのある数多くの選手が出場し、メダル獲得や入賞を果たすなど、素晴らしい活躍を見せた（千葉県ゆかりの選手の競技結果については資料編p.252参照）。

### 水泳男子50m平泳ぎ、50m・100m・200m自由形、150m個人メドレー——鈴木孝幸選手

浦安市在住の鈴木孝幸選手は、パラリンピックに5大会連続の出場を果たし、出場した水泳<sup>1</sup> 5種目すべてでメダルを獲得した。鈴木選手は先天性の四肢欠損という障害により、右腕は肘まで、左手は指が3本、両足は膝下がなく、6歳から水泳を始め、高校3年生で出場した2004年のアテネ大会では、メドレーリレーで銀メダルを獲得し、その後2008年の北京大会で金（50m平泳ぎ）と銅（150m個人

▶ 1 Sは自由形・背泳ぎ・バタフライ、SBは平泳ぎ、SMIは個人メドレー、数字の1～10は運動機能障害（肢体不自由）の重度～軽度、11～13は視覚障害の重度～軽度、14は知的障害、15は聴覚障害、21はその他。

メドレー）、2012年のロンドン大会で銅2個（50m平泳ぎ、150m個人メドレー）のメダルを獲得した。2016年のリオデジャネイロ大会では50m平泳ぎと150m個人メドレーに出場したが、4位入賞とメダルを逃し、再び世界の頂点を目指して練習しながら、東京2020パラリンピック競技大会の招致にも携わった。

今大会では、50m平泳ぎと50m・100m・200



男子100m自由形のメダル授与式で金メダルを手にする鈴木選手

© YUTAKA / アフロスポーツ



男子100m自由形決勝で泳ぐ鈴木選手

© フォート・キシモト



m自由形、150m個人メドレーの5種目に出場。8月25日のパラリンピック初日に50m平泳ぎ（運動機能障害SB3）で銅メダル、翌26日の100m自由形（運動機能障害S4）では2008年北京大会以来の金メダルを獲得した。この金メダルは、東京2020パラリンピック日本勢初の金メダルであり、パラリンピックでの日本勢の金メダル獲得は2大会ぶりとなった。

さらに8月28日の男子150m個人メドレー（運動機能障害SM4）で銅メダル、30日の200m自由形（運動機能障害S4）では銀メダル、9月2日に行われた最終種目の50m自由形（運動機能障害S4）でも銀メダルを獲得し、出場全種目におけるメダル獲得を達成した。

### 水泳男子100m背泳ぎ——<sup>くぼたこうた</sup>窪田幸太選手、 男子4×100m 34ポイントメドレーリレー ——<sup>おぎわらこうたろう</sup>窪田幸太選手、<sup>おぎわらこうたろう</sup>荻原虎太郎選手

千葉市出身（県立実籾高校卒業）の窪田幸太選手は、今大会で水泳競技3種目に出場した。左腕に先天性の障害がある窪田選手は、0歳からスイミングスクールに通っており、小学5年生から本格的に水泳を始めた。男子100m背泳ぎ（運動機能障害S8）の決勝では自身が予選で出した日本新記録をさらに更新するタイムで5位に入賞した。また、男子4×100m 34ポイントメドレーリレーでも日本新記録で8位に入賞した。



男子4×100m 34ポイントメドレーリレー決勝で背泳ぎのスタートを切る窪田選手 ©松尾/アフロスポーツ

千葉市出身（千葉明德高校卒業）の荻原虎太郎選手は、5歳からスイミングスクールに通い、中学生で本格的に水泳を始めた。4歳のときに悪性になった軟骨肉腫を摘出したことで、右肩と右足にまひが残った。今大会では4種目に出場し、男子4×100m 34ポイントメドレーリレーでアンカーを務め、日本の8位入賞に貢献した。

窪田選手、荻原選手ともに今回が初のパラリンピック出場となった。

### 水泳女子50m・400m自由形、混合リレー ——<sup>つじうちあやの</sup>辻内彩野選手

昭和学院高校（市川市）を卒業した辻内彩野選手は、50m・400m自由形（視覚障害S13）、100m平泳ぎ（視覚障害SB13）、混合4×100m 49ポイントフリーリレーの4種目に出場した。400m自由形では予選で日本記録を更新して8位に入賞し、50m自由形では決勝で日本新記録を更新して7位入賞となった。また、混合リレーでも日本新記録を更新し、5位入賞を果たした。

辻内選手は、父がスイミングクラブの指導者、母



男子4×100m 34ポイントメドレーリレー決勝で自由形を泳ぐ荻原選手 ©松尾/アフロスポーツ



女子400m自由形決勝で泳ぐ辻内選手 ©長田洋平/アフロスポーツ



卓球男子シングルス準々決勝で戦う竹守選手

©松尾/アフロスポーツ



卓球女子団体で戦う竹内選手

©フォート・キシモト



アーチェリー混合団体で的を狙う大山選手

©長瀬友哉/フォート・キシモト

は高校総体や国体に出場した元水泳選手という水泳一家に育ち、小学生から水泳に打ち込んできたが、高校3年生で病気を発症、進行性の黄斑ジストロフィーと診断され、大学でパラ水泳に転向した。

### 卓球男子シングルス——<sup>たけもりたけし</sup>竹守 彪 選手

松戸市出身の竹守彪選手は卓球<sup>2</sup>男子シングルスC11（知的障害）に出場した。竹守選手は発達遅滞の障害があり、中学生のとき、卓球部に入ったことをきっかけに卓球競技を始めた。21歳のときに出場したアジアパラ競技大会で金メダルを獲得し、2016年のリオデジャネイロ大会では、卓球男子の知的障害クラスで唯一の日本代表となった。2大会連続のオリンピック出場を果たした今大会では、予選リーグを1勝1敗で突破した後、準々決勝で敗れ、5位入賞となった。

### 卓球女子団体——<sup>たけうちのぞみ</sup>竹内 望 選手

鎌ヶ谷市出身（県立松戸六実高校卒業）の竹内望選手は、生まれるときに首に圧力がかかったことが原因で、右腕の首元から指先がまひしている。

20歳でパラリンピックの卓球競技を始め、これまでに国内外の大会で活躍しており、今回が初のパラリンピック出場となった。

今大会では卓球競技2種目に出場し、女子団体（C9-C10）では、初戦で金メダルを獲得したポーランドに敗れ、5位となった。

### アーチェリー——<sup>おおよまこうじ</sup>大山 晃 司 選手

松戸市出身の大山晃司選手は、警視庁初のパラリンピアンであり、アーチェリー<sup>3</sup>競技の男子個人と混合団体に出場し、両種目で6位入賞を果たした。

大山選手は、2012年に大学で所属していた体操





フィニッシュへ向かって走る秦選手

© 青木紘二/アフロスポーツ

部の練習中に頸椎<sup>けいつい</sup>を損傷し、一時は、首から下が完全にまひ状態となった。右腕があまり動かないため、左手で弓を持ち、口で矢を引いている。リハビリの過程で2016年にアーチェリーを始め、警察署に勤務しながら、わずか1年後の2017年に全国大会で優勝した。

### トライアスロン——秦由加子選手<sup>はた ゆかこ</sup>

トライアスロン<sup>4</sup>女子（運動機能障害PTS2）には千葉県出身の秦由加子選手が出場した。秦選手は13歳のとき骨肉腫<sup>だいたいぶ</sup>を発症し、右脚を大腿部より切断している。2008年からパラ水泳のクラブチームに所属し競泳でパラリンピック出場を目指したがかなわず、2013年にトライアスロンに転向してパラリンピアンとなった。今大会では、パラリンピック初出場となった2016年のリオデジャネイロ大会に続いて6位に入賞した。

### パワーリフティング——宇城元選手<sup>うじろはじめ</sup>

パワーリフティング<sup>5</sup>男子72kg級に、9年ぶり



パワーリフティングの試技を終えた宇城選手

© 松尾/アフロスポーツ

3大会目のパラリンピック出場となる順天堂大学職員（佐倉市在住）の宇城元選手が出場し、6位に入賞した。宇城選手は、大学4年生のときにバイクの事故が原因で車いす生活となり、車いすバスケットボールを始めた後、パワーリフティングに出会った。2004年のアテネ大会は8位、2012年のロンドン大会は7位で、男子72kg級および80kg級の日本記録を持っている。

- ▶ 2 C1～5は車いすの重度～軽度、C6～10は立位の重度～軽度、C11は知的障害。
- ▶ 3 弓は一般的なリカーブに加えて先端に滑車のついたコンパウンドの2種類を使用。障害の種類や程度に応じてW1（四肢に障害のある車いす使用者）、W2（下半身にまひなどのある車いす使用者）、ST（立位または座位）の3クラスがある。男女3種目（リカーブ、コンパウンド、W1）と団体（リカーブ、コンパウンド、W1の男女ペア）があり、障害の種類や程度に応じて用具を工夫することも認められている。
- ▶ 4 パラリンピックはオリンピックの半分のスプリント・ディスタンス（スイム0.75km・バイク20km・ラン5km）の合計タイムで競争。障害の種類やレベルによりクラス分けされ、座位・立位・視覚障害の選手が出場する。PTWC1～2は車いすの重度～軽度、PTS2～5は運動機能障害（肢体不自由・立位）の重度～軽度、PTVI1～3は視覚障害の重度～軽度。
- ▶ 5 下肢に障害がある選手が上半身の力を使ってバーベルを持ち上げ、重さを競う。



銅メダルを獲得した車いすラグビー日本代表  
前列左から1番目が池崎選手、4番目が今井選手、5番目が羽賀選手

© 松尾/アフロスポーツ



車いすラグビー準決勝でボールをキープする羽賀選手（中央） © AP/アフロ



柔道女子70kg級3位決定戦で戦う小川選手 © 長田洋平/アフロスポーツ

## 車いすラグビー——<sup>いまいともあき</sup>今井友明選手、<sup>はがまさゆき</sup>羽賀理之選手、<sup>いげさまだいすけ</sup>池崎大輔選手

8月25日に、車いすラグビー<sup>6</sup>の予選リーグが開幕した。予選リーグでは、フランス、デンマーク、世界ランキング1位のオーストラリアと対戦して全勝し、準決勝に進んだ。準決勝でイギリスに敗れたものの、3位決定戦では再びオーストラリアに勝利し、リオデジャネイロ大会に続いて銅メダルを獲得した。

県ゆかりの選手としては、<sup>けいずい</sup>頸髄損傷で両手足に障害を持つ今井友明選手（我孫子市出身）と羽賀理之選手（松戸市出身、千葉市在住）、進行性の難病で両手足などにまひのある池崎大輔選手（浦安市在住）

が代表入りした。今井選手と羽賀選手は、リオデジャネイロ大会からの2大会連続出場、池崎選手は、ロンドン大会からの3大会連続出場を果たした。今大会で、今井選手は守備の要、羽賀選手は副キャプテン、池崎選手はエースとしてチームを牽引した。

## 柔道——<sup>おがわかずさ</sup>小川和紗選手

視覚障害者による柔道女子70kg級の3位決定戦で、パラリンピック初出場の小川和紗選手がロシアパラリンピック委員会の選手から技ありを奪って優勢勝ちし、銅メダルを獲得した。小川選手は市原市出身で、先天性の視神経<sup>こうしゆ</sup>膠腫のため視力は両眼とも0.01程度である。中学校で柔道を始めたが、視力





5人制サッカーのフランス戦に出場した佐々木選手（背番号8）

©松尾/アフロスポーツ



メダル授与式で金メダルを手にする国枝選手

© SportsPressJP /アフロ



男子シングルス決勝でボールを追う国枝選手

©青木結二/アフロスポーツ

が低下し、高校2年生で盲学校へ転入した。その後一度競技から離れたが、高校卒業後に視覚障害者柔道を始め、2017年ワールドカップでは銅メダルを獲得している。

### 5人制サッカー——<sup>ささきやすひろ</sup>佐々木康裕選手

今大会が5人制サッカー（ブラインドサッカー）でパラリンピック初出場となる日本は、初戦でフランスに勝利。その後の試合に敗れ、予選リーグ突破はならなかったが、5-6位決定戦でスペインを破り、5位入賞となった。

初戦に出場した四街道市出身（麗澤大学卒業）で千葉県職員の佐々木康裕選手は、生まれつきの緑内障に加え、小学生のころに網膜剥離を併発したことで手術を繰り返すうちに視力が低下した。

視力があつたころからサッカーが好きで、27歳のときにブラインドサッカーを始めた佐々木選手は、

競技を始めて数年後には日本代表に選出され、これまで国際大会にも多く出場している。

### 車いすテニス——<sup>くにえだしんご</sup>国枝慎吾選手

車いすテニス<sup>6</sup>では、柏市出身の国枝慎吾選手が男子シングルスと男子ダブルスの2種目に出場した。シングルスでは、決勝でトム・エフベリンク選手（オランダ）をストレートで破り、2大会ぶり3度目の金メダルに輝いた。前日に行われた<sup>さなだたかし</sup>真田卓選手とペアで出場したダブルスでは、3位決定戦で同じエフベリンク選手とマイケル・シェファース選手のペアに屈し、4位入賞となっていた。

国枝選手は、9歳のときに<sup>せきざい</sup>脊髄の病気で下半身が

▶6 障害の程度ごとに最も重い0.5から最も軽い3.5まで0.5刻みに持ち点が定められており、障害の軽い選手の数が多くなりすぎないように、コート上の4人の合計を8点以内としなければならない。

▶7 ツーバウンドでの返球が認められているほかは、オリンピックのテニスと競技ルールは変わらない。

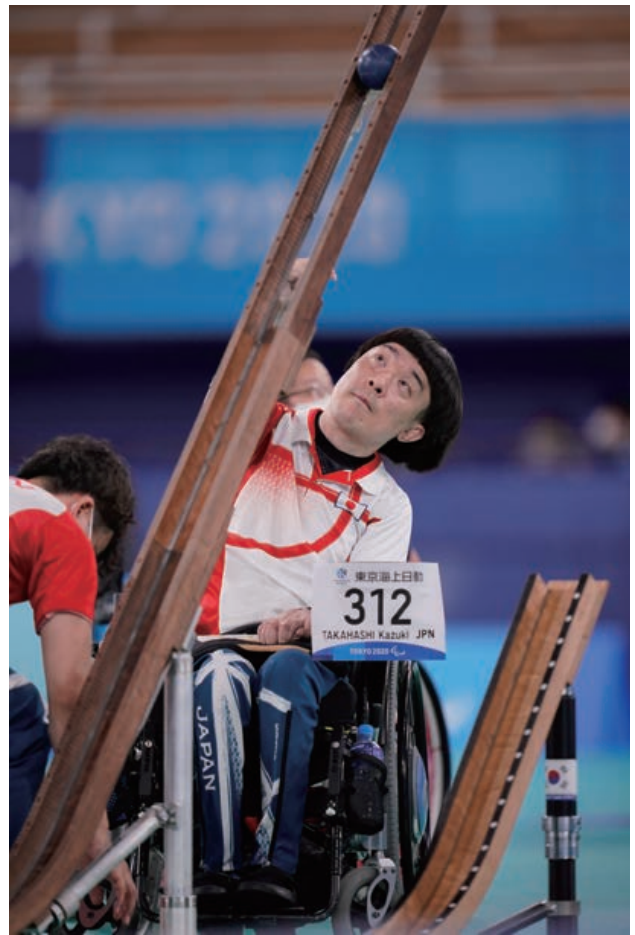


ポッチャチーム3位決定戦でボールを投げる廣瀬選手  
© 西村尚己/アフロスポーツ

不自由になり柏市の吉田記念テニス研修センターで車いすテニスを始めた。初のパラリンピック出場となった2004年アテネ大会から5大会連続でパラリンピックに出場し、これまでも多数のメダルを獲得してきた車いすテニスの第一人者であり、今大会には世界ランキング1位で臨み、日本選手団の主将も務めた。

### ポッチャチーム——<sup>ひろせ たかゆき</sup>廣瀬隆喜選手

君津市出身（県立袖ヶ浦養護学校卒業）の廣瀬隆喜選手は、ポッチャ<sup>♂</sup>チーム（脳性まひ・運動機能障害BC1/BC2）に出場し、2大会連続のメダルとなる銅メダルを獲得した。先天性の脳性まひにより、四肢に障害があり、中学校でビームライフル、高校で車いす陸上に取り組んだ後、特別支援学校の教員に勧められてポッチャを始めた。廣瀬選手は、2008年の北京大会でパラリンピックに初出場してから、4大会連続で出場を果たしており、リオデジャネイロ大会ではチームで銀メダルを獲得した。



ポッチャペア決勝でランプを用いて投球する高橋選手  
© SportsPressJP /アフロ

### ポッチャペア——<sup>たかはしかずき</sup>高橋和樹選手

9月4日に行われたポッチャペア（脳性まひ・運動機能障害BC3）準決勝に高橋和樹選手が登場し、世界ランキング1位のギリシャを5対1で撃破した。決勝で同4位の韓国に同点からのタイブレークの末敗れたが、ペア初のメダルとなる銀メダルを獲得した。

高橋選手は、市川市出身（千葉商科大学卒業）で、中学校、高校時代に県大会や地方大会で優勝するなどの経験を持つ柔道選手だったが、高校2年生のときに練習試合で頸椎を骨折するけがを負い、車いす生活となった。パラリンピックの東京開催が決まった翌2014年にポッチャを始め、2016年のリオデジャネイロ大会に出場したが、同大会では予選敗退。今大会で初のメダル獲得を果たした。

▶8 白のジャックボール（目標球）を投げた後、対戦する両者がそれぞれ赤と青の6球を投げ合い、自球をよりジャックボールに近づけたチームまたは個人が勝者となる。手で投げるのでできない選手はキック、あるいは競技アシスタントのサポートを受けながら「ランプ」と呼ばれる投球補助具（勾配具）を使ってボールを転がすことができる。BC3は脳性まひおよびその他の障害の最も重いクラス、BC1～2は脳性まひの重度～軽度、BC4はその他の重度障害。





男子5000m決勝で走る樋口選手

© YUTAKA / アフロスポーツ



やりを投げる山崎選手

© AP / アフロ

### 陸上競技男子5000m——ひぐちまさゆき樋口政幸選手

柏市在住で、柏市を拠点として競技に取り組んでいる樋口政幸選手は、陸上<sup>9</sup>男子5000m（車いすT54）で決勝に進出し、8位に入賞した。

今大会でパラリンピック3大会連続出場となる樋口選手は24歳のときにバイク事故で脊髄を損傷し、リハビリの一環で車いすマラソンを始め、ロンドン大会出場の後マラソンからトラック種目に転向した。前回のリオデジャネイロ大会では4位入賞を果たしており、今大会では順位を下げたものの、レース中は集団の中で巧みな位置取りをし、ベテランの力を見せた。

### 陸上競技男子やり投——やまざきあきひろ山崎晃裕選手

8月30日に、順天堂大学（印西市）職員の山崎

晃裕選手が陸上男子やり投（上肢障害F46）の決勝に出場し、7位に入賞した。

山崎選手は生まれたときから右手首の欠損があり、高校生までは野球部に所属し、大学では身体障害者野球で世界大会に出場した。その後パラリンピック出場を目指して2015年に野球で培った強肩を生かせるやり投に転向し、2017年には60m65cmの日本記録を樹立した。また、日本パラ陸上競技選手権

▶ 9 Tは競走種目・跳躍種目、Fは投擲（とうてき）種目。数字の11～14は視覚障害の重度～軽度、20は知的障害、30～34は車いす脳性まひの重度～軽度、35～38は立位脳性まひの重度～軽度、40～41は低身長<sup>10</sup>の重度～軽度、42～44は義足なし・下肢切断/下肢機能障害の重度～軽度、45～47は上肢切断・上肢機能障害の重度～軽度、48はその他の軽度の片下肢または両下肢の障害、49はその他の軽度の片上肢または両上肢の障害、51～57は車いすの脳性まひ以外（頸椎損傷、脊椎損傷、切断、機能障害）、58は座位のその他の軽度の下肢障害、61～64は義足・下肢切断の重度～軽度。



男子400m決勝で走る松本選手（左）

© SportsPressJP / アフロ



男子1500mで力走する岩田選手

© 西村尚己 / アフロスポーツ

およびジャパンパラ陸上競技大会では4連覇を成し遂げるなど、数々の世界大会に出場し、上位入賞を果たしている。

### 陸上競技男子400m——<sup>まつもと たける</sup>松本武尊選手

今大会がパラリンピック初出場となる千葉市出身（専修大学松戸高校卒業）の松本武尊選手は、陸上男子100m（脳性まひT36）・400m（脳性まひT36）に出場した。400m決勝では7位入賞、100mではパーソナルベストを更新するという成績を取めた。松本選手は短距離選手として活躍していた高校2年生のときに病に見舞われ、両手足にまひが残った。一時陸上を断念したが、リハビリ後にパラリンピックメダリストと同じレースに出場したことがきっかけでパラ陸上を始めた。100m、200m、400mで日本記録を更新し、現在3種目で日本記録を保持している。

### 陸上競技男子1500m——<sup>いわた ゆうき</sup>岩田悠希選手

流山市出身（県立特別支援学校流山高等学園卒業）の岩田悠希選手は、男子1500m（知的障害T20）に出場し、8位に入賞した。数字に強いこだわりがある岩田選手は、所属する陸上クラブの指導者から示される目標タイムを達成することで実力を伸ばし

てきた。2020年に行われた日本選手権の男子1500m知的障害のクラスで、世界ランキング5位相当の好タイムを記録し、今大会でパラリンピック初出場を果たした。

### 陸上競技混合4×100mユニバーサルリレー、<sup>すずき ともき</sup>男子マラソン——鈴木朋樹選手

館山市出身・千葉市在住（木更津総合高校、城西国際大学卒業）の鈴木朋樹選手は、陸上競技で計4種目に出場した。

混合4×100mユニバーサルリレーではアンカーを務め、銅メダルを獲得した。ユニバーサルリレーは男女2人ずつの4人が視覚障害、切断と機能障害（立位）、脳性まひ（立位）、車いすの順で走るパラリンピックの多様性を象徴する新種目で、バトンを使わず背中など体の一部にタッチする。

鈴木選手は大会最終日の9月5日に東京・国立競技場を発着点とするロードで行われた男子マラソン（車いすT54）では7位に入賞した。生後8カ月の交通事故で脊髄を損傷した鈴木選手は、両親の勧めで車いす陸上に出会い、中学校から本格的に競技に取り組むようになった。2019年4月のロンドンマラソンで3位となり、今大会のパラリンピック代表内定の第一号となった。





ユニバーサルリレーで  
高松選手からのタッチを受けて走る鈴木選手  
©三船貴光/フォート・キシモト



里見選手のシングルス決勝の試合  
©松尾/アフロスポーツ



女子ダブルス金メダルの里見選手(左)と山崎選手(右)  
©長瀬友哉/フォート・キシモト

## バドミントン女子シングルス、女子ダブルス

### ——<sup>さとみさりな</sup>里見紗李奈選手

東京2020パラリンピックから正式競技となったバドミントン<sup>10</sup>の女子シングルス(WH1)で、八街市出身(県立千城台高校卒業)の里見紗李奈選手(世界ランキング1位)がスジラット・プッカム選手(タイ・世界ランキング2位)との決勝に臨み、金メダルを獲得した。また、<sup>やまぎゆうま</sup>山崎悠麻選手とペアを組んで出場した女子ダブルス(WH1-WH2)でも決勝で中国の劉禹彤・尹夢璐選手を破り、金メダルを獲得した。

里見選手は、高校3年生の2016年に交通事故で脊髄を損傷し、両脚に障害が残ったが、翌年、父親に連れられて、<sup>むらやまひろし</sup>村山浩選手が代表を務める千葉市の車いすバドミントンクラブの練習に参加し、競技を始めた。2018年には「インドネシア2018アジアパラ競技大会」で銅メダルを獲得し、同年から日本選手権で3連覇を果たしている。

## バドミントン女子シングルス、混合ダブルス

### ——<sup>すぎのあきこ</sup>杉野明子選手

女子シングルス(SU5)の3位決定戦で、市原市出身(県立市原八幡高校卒業)の杉野明子選手が<sup>かめやまかえで</sup>亀山楓選手との日本人対決を制し、銅メダルを獲得した。また、混合ダブルス(SL3-SU5)で、準決勝でフランスのペアに敗れたが3位決定戦でインドのペアに勝利し、銅メダルを獲得した。

杉野選手は生まれつき左腕に障害があるが、中学時代にバドミントンを始め、大学時代にパラバドミントンに出会った。2017年の世界選手権では女子ダブルスで金メダルを獲得。2018年11月には左膝靭帯断裂のけがを負ったが、けがから復帰し、今大

▶10 「車いす」と、上肢障害、下肢障害、低身長「立位」に分かれ、障害の程度により区分されている。また車いすと立位のSL3では、半面のコートを使用するなど特別ルールが適用される。WH1～WH2は車いすの重度～軽度、SL3～SL4は立位の下肢障害の重度～軽度、SU5は立位の上肢障害、SH6は立位の低身長。

混合ダブルス3位決定戦でシャトルを追う杉野選手（左）



© アフロスポーツ



男子ダブルス3位決定戦でレシーブする村山選手（右）

© 森田直樹/アフロスポーツ



男子シングルス予選で戦う長島選手

© SportsPressJP/アフロ

会では女子シングルス、混合ダブルスの2種目でメダル獲得を果たした。

### バドミントン男子シングルス、男子ダブルス

——<sup>むらやまひろし</sup>村山浩選手、<sup>ながしまおさむ</sup>長島理選手

村山浩選手（四街道市出身、県立千葉商業高校・城西国際大学卒業）は、男子シングルス（WH1）準々決勝で長島理選手（千葉大学卒業・千葉大学大学院修了）に勝利したが、準決勝で中国選手に、3位決定戦で韓国選手に敗れ、4位入賞となった。<sup>かじわらだい</sup>梶原大暉選手とのペアで臨んだ男子ダブルス（WH1-WH2）の3位決定戦では、タイのペアを破って銅メダルを獲得。長島選手は、男子シングルス（WH1）で5位入賞となった。

村山選手は34歳で難病を発症し車いす生活に、長島選手は大学時代に交通事故で脊髄を損傷し車い

す生活となった。両選手とも、これまでに車いすバドミントンの国内外の大会で活躍してきた実績を持っている。

### 車いすバスケットボール

——<sup>かわはらりん</sup>川原凜選手、<sup>こうざいひろあき</sup>香西宏昭選手

車いすバスケットボール<sup>11</sup>日本男子は、予選リーグをグループ2位で通過し、その後、強豪のオーストラリア、イギリスに勝利し、初の決勝進出を決めた。決勝ではリオデジャネイロ大会で金メダルを獲得したアメリカに惜しくも敗れたが、この競技で日本男子初のメダルとなる銀メダル獲得を果たした。車いすバスケットボール男子代表は、この競技の中

▶11 障害の程度ごとに最も重い1.0から最も軽い4.5まで0.5刻みに持ち点が定められており、障害の軽い選手も重い選手も等しく出場できるよう、コート上の5人の合計を14点以内としなければならない。





車いすバスケットボール男子で銀メダルを獲得した日本代表 前列左端が川原選手、国旗の右側(向かって左)を持つのが香西選手 ©長田洋平/アフロススポーツ



車いすバスケットボール男子決勝で戦う香西選手 ©長田洋平/アフロススポーツ

心選手として活躍してきた京谷和幸さん(元千葉県教育委員)がヘッドコーチを務めており、県ゆかりの川原凜選手(千葉県在住、千葉ホークス所属)、香西宏昭選手(千葉県立若松小学校・若松中学校卒業)が代表メンバーとして選出された。川原選手は、生まれたときから脊髄の病気で下半身に障害があり、病院でクラブチームの監督から声をかけられたことがきっかけで高校に入ってから本格的に競技に取り組んだ。香西選手は、生まれたときから両足のももから下がなく、小学6年生のときに体験会に参加したことがきっかけで競技を始めた。

川原選手は今大会が初めてのパラリンピック出場、香西選手は今大会で4大会連続のパラリンピック出場となった。



ゴールボール男子予選でスローイングを行う佐野選手

©YUTAKA/アフロススポーツ

### ゴールボール——<sup>さのゆうと</sup>佐野優人選手

順天堂大学(印西市)に在籍する佐野優人選手が出場したゴールボール男子は、パラリンピック初出場ながら予選リーグを1位通過。準々決勝で中国に敗れたが、5位入賞を果たした。

佐野選手は、中学3年生のときに、視力が徐々に低下するレーベル遺伝性視神経症と診断され、当時打ち込んでいた野球を断念したが、家族の勧めでゴールボールを始めた。競技歴5年ながらすべてのポジションで安定した守備力が評価され、日本代表に選出。本大会では計13点を決めるなど、攻撃面でもチームに貢献した。



interview

銅メダルをかけて柔道女子70kg級3位決定戦で戦う小川選手

©長瀬友哉/フォート・キンモト

## 柔道 おがわかずさ 小川和紗選手

# ロスタイムをチャンスに、何かにぶつかっても良い方向に切り替える

——東京2020パラリンピック柔道女子70kg級銅メダル獲得おめでとうございます。

**小川選手** ありがとうございます。初めてパラリンピックに参加できたこと、また、コロナ禍で開催していただいたことに感謝しています。たくさんの方々を支えられ、コンディションを整えて万全の状態でいろいろなことができました。その中で銅メダルを取ることができて、とても達成感がありましたし、金メダルがほしいという欲が出ました。今まで24年間育ててくれた両親をはじめ周りの人に銅メダル以上の恩返しをしたいので、これから技とともに人間的な部分も磨いて、パリ大会まで3年間で仕上げていきたいと思っています

す。応援していただいてありがとうございました。

——盲学校に転入して一度柔道から離れた後、再び柔道を始められて、大きな成果を挙げられました。パラリンピックは1年延期となりましたが、どのような気持ちで臨まれましたか。

**小川選手** 私はむしろこの1年がチャンスだと思いました。できることは限られているので、電柱にチューブをくくりつけてひたすら打ち込みをしたり、手首の強化をしたりしました。

——初めてのパラリンピックは想像していたとおりでしたか。それともまた違った感覚でしたか。

**小川選手** やはり無観客というイメージはなかったもので想像とは違いました。でもいろいろな方々



が支えてくれたという自信はありましたし、楽しかったです。

——試合の中で苦しい時間帯にはどうしているのかを考えて臨まれているのですか。

小川選手 私は苦しいとはあまり思わなくて、もうすべて楽しいと思いながらやっています。

——柔道から一度離れた後、柔道を再開するきっかけはどういったものだったのですか。

小川選手 私が柔道より楽しいものを見つけることができずにいたとき、母に「視覚障害があっても柔道ができる場所はないの」と言われて。母は私に好きな柔道をさせて、私の人生をもっと華やかにしたいという気持ちがあったみたいですね。盲学校の3年生のときに体育の先生に相談して道場を探していただいて、卒業後にそこに行きました。

——柔道の魅力はどういうところにありますか。

小川選手 嘉納治五郎かのうじごろうさんが唱えた“自他共栄”だと思います。柔道は相手なしではできませんし、常に相手に感謝という気持ちを教えてもらえる武道なので、私は柔道が素敵だと思います。

——今まで試合をされてきた中で印象に残っている相手はいますか。

小川選手 パラリンピックの3位決定戦で対戦したロシアのオルガ・ザブロドスカヤ選手とはこれまで4回戦っているのですが、70kg級に変更して世界選手権に出場した初めての対戦で、肘の関節を取られてけがをしてしまいました。でも、そういう苦しい思いもあった中でリベンジがかなって、この最高の舞台で勝つことができたことをとてもうれしく思っています。



自分自身を写した写真パネルにサイン



練習中の小川選手（左）

——小川選手はけがをしたときなどに、どういうことを考えますか。

小川選手 一般的にけがはロスタイムだと思うのですが、私は逆にチャンスだと考えるようにしています。けがをしたところは安静にしないといけません。けが以外の健康なので、苦手な部分を強化するのに最適な時間だと思って取り組んでいると、自然と回復も早まります。そうして乗り越えています。

——次のパリ大会に向けた意気込みをお聞かせください。

小川選手 今回銅メダルを取ることができましたが、表彰台で隣の金メダルを見たので、やはり次は金メダルが欲しいという欲がかなり大きいです。もう少し自分自身や技を磨いて、パリ大会に3年間で仕上げたいと思います。

——千葉県の子どもたちに、小川選手のようにいつもポジティブに元気で将来に向かっていけるメッセージをお願いします。

小川選手 例えば、私は会場が眩しくて最悪、と思っても、そこは選手を派手に見せてくれる演出だと切り替えます。その場その場でいろいろ苦しいことがあると思いますが、つらいと思うと本当につらくなってしまいますので、別のことを考えて気分を変えたいと思います。考える時間も大事ですし、いろいろなことを良い方向に考えて、ぶつかっているものと向き合ってほしいと思います。



interview

トライアスロン女子で6位に入賞した秦選手（左）

## トライアスロン は た ゆ か こ 秦由加子選手

# 視野を広く持って、 地球規模の経験を

——現在所属している千葉ミラクルズSC（スイミングクラブ）への入会が人生の転機になったと聞きました。

**秦選手** 2008年に27歳で千葉ミラクルズに入って、初めて自分と同じような境遇の仲間ができました。足を切断したのは13歳、中学1年生のときで、多感な時期だったこともあり、障害があるということが私にとってはコンプレックスでした。友達はたくさんいて、いろいろな面で助けてくれましたが、友だちが走っているのを見るのも嫌だったし、みんなと同じようにはできないと思って体育の授業には一度も参加せず、体育祭も中学校、高校の6年間で一度も見に行っただけです。人前に出ることも恥ずかしかったので、義

足であるということを常に隠しながら過ごしていたような気がします。

社会人になって何か人生を変えるきっかけが欲しいって思って始めたのが水泳で、初めにリーダーの上田孝司うえだたかしさんにこれから水泳でどんどん人生が楽しくなるよと言われたのですが、そのとおりになりました。

——その後トライアスロンに転向されたのは、何がきっかけでしたか。

**秦選手** 2012年のロンドンパラリンピックを目指すため、仕事の前の朝6時から練習できる稲毛インターナショナルスイミングクラブのトライアスロンコースに入会したのがきっかけです。水泳のトレーニングが目的でしたが、ロンドン大会出



場を逃した後、初めてトライアスロンがパラリンピックの種目に加わる2016年のリオデジャネイロ大会で日本初の代表になることを目標の一つに決めたのですが、何よりもトライアスリートが生き生きして楽しそうだったのが2013年に転向した決め手です。

——実際にトライアスロンを始めてみてどうでしたか。

**秦選手** 心の底からやってよかったと思っています。毎日が挑戦だし、大腿切断でトライアスロンをやっている日本の女子選手は私しかいないので、周りの人からアドバイスをもらいながら前例のないことをやっていく作業が楽しいというところもあります。また、32歳でトライアスロンを始めて、義足を自分で調整するようになって初めて自分の義足に愛着がわきました。何にも気にせず外に出られるようになったのも32歳からです。

——障害を乗り越えるきっかけとしてトライアスロンが大きかったということですね。

**秦選手** 競技特性が大きいと思います。屋外競技なので心が開放的になるし、トライアスロンは常に自分との戦いで、障害の有無など当然関係ないし、年齢も性別も関係ありません。それぞれが自分たちの可能性を広げて互いにそれを称え合う。それがトライアスロンのいいところです。そういう人たちに憧れて、自分も開放的に毎日を過ごしていけたら幸せになるだろうと思いました。

——パラリンピックについてどのように考えていますか。

**秦選手** パラリンピックという世界規模のイベン

トがあるからこそ、たくさんの人に関わってもらえて、私たちも可能性を広げていけるし、競技を見た人が「私も何かやってみたい」と思うきっかけになるかもしれません。目的はパラリンピックではなくて、日常生活でより健康に過ごしていくということだと思います。パラリンピックはいろんな人の目に届きやすい大会なので、まず知るきっかけとして大切だと思っています。

——これからの目標、夢についてお願いします。

**秦選手** 2024年のパリ大会を目指します。その一方で、私自身も人生を豊かにするために競技活動をやっていますので、一人でも多くの人と出会っていろいろな考えを聞かせてもらって、誰もが本当に心地よく住みやすい社会になるよう、微力ながら自分ができることをやっていければ、支援していただきながら競技をやっている意味が出てくるのかなと思っています。

——アスリートとして、未来のアスリート、子どもたちにメッセージをお願いします。

**秦選手** 世界は広いよって感じです。自分が知っているのはコップの中の水で、それ以外に世界は広がっています。何かを続けていったあかつきには地球規模の経験ができるので、どんどんやっていってもらいたいと思います。いろいろなところに行って、いろいろな人と出会うということが刺激になるので。視野を広く持って、競技活動を通して何をやるかというところまで考えてスポーツに取り組んだら楽しいよ、ということを伝えたいと思います。



千葉ミラクルズSCの仲間と（後列左から3番目が秦選手）





interview

車いすバスケットボール男子決勝でアメリカと戦う川原選手

© 松尾/アフロスポーツ

## 車いすバスケットボール 川原凜選手

かわはらりん

# マシンとマシンのぶつかり合う迫力、 多様な連携プレーの魅力を伝えたい

—東京2020パラリンピック銀メダル獲得おめでとうございます。車いすバスケットボールに大きな扉が開かれたと思います。

**川原選手** 決勝でアメリカと競ったことや、準決勝でイギリスを相手に「走るバスケットボール」で勝てたということは、本当に大きな収穫になりました。チームのテーマであった「ディフェンスで世界に勝つ」ということと、スローガンであった「一心」ということを一貫してやった成果で、本当にうれしく思っています。

—車いすバスケットボールを始めたきっかけと障害の程度について教えてください。

**川原選手** 生まれたときから脊髄空洞症という病気で下半身に障害があり、お腹の下くらいから感

覚がありません。1.5クラスです。病院で地元のクラブチームの監督に声をかけられたのがきっかけですが、車いすバスケットボールを描いた漫画「リアル」(井上雄彦<sup>いのうえたけひこ</sup>作)の影響もありました。2012年、高校1年生から競技に取り組むようになり、高校を卒業して18歳で千葉ホークスに入団しました。

—ご自身はパラリンピック初出場でした。

**川原選手** 最初は緊張して硬くなってしまいましたが、2戦目の韓国戦からは本当に楽しんでプレーできました。

—イギリスに勝ったときはどんなお気持ちでしたか。

**川原選手** 2018年世界選手権で金メダルを獲得



した強豪チームなので、胸を借りる気持ちで準決勝に臨んだのですが、実感がなかったですね。

——川原選手はディフェンスをはじめ活躍されましたが、自分の中でこれはいいプレーだったと感じられたのはどの場面でしたか。

**川原選手** イギリス戦でシュートを決めたシーンも印象的だったと思うのですが、決勝のアメリカ戦で、世界ナンバーワンのスティーブ・セリオ選手から意図的にファールを誘って取れたというのは本当に自信になりました。

——流れを引き寄せるようなプレーだったと思います。車いすバスケットボールにさらに関心が高まってきたと思いますが、車いすバスケットボールがさらに強くなるために県民の皆さんなどをお願いしたいことはありますか。

**川原選手** 健常者と障害者という偏見の目があって、これから先もその目はなくなるかもしれませんが、差は縮められると思うのです。そのつなぎ役をするのが私たちパラアスリートだと思っていますので、フラットな気持ちで応援いただくとありがたいです。

——車いすバスケットボールの試合の迫力を会場で見ると、本当にアスリートの世界だというのが実感できると思います。

**川原選手** そうですね。生で見ただけだと、迫力があって本当におもしろいスポーツなので、

機会があればぜひお越しいただければと思います。——今後の目標を教えてください。

**川原選手** 天皇杯の優勝は悲願です。また、2022年11月に開催される世界選手権で結果を出すということも目標にしています。追われる立場になり、勝ち続けていくということがまた重要になってくると思いますので頑張りたいと思っています。——車いすバスケットボールの魅力についてお伺いします。

**川原選手** マシンとマシンがぶつかり合うので、「激しさ」が魅力の一つ。もう一つは、障害の重い人と軽い人が共にコートに出るという特徴があるのですが、その中で生み出される連携プレーというのが車いすバスケットボールのおもしろみだと思います。その魅力を今やらせてもらっている学校での講演やメディアなどを通して伝えていければと思っています。

——最後に、県民の皆さんへのメッセージをお願いします。

**川原選手** 千葉県民の皆さんは、車いすバスケットボールをはじめとするパラスポーツに対して本当に理解を持っていただいていると感じています。皆さんにもっとパラスポーツ、そしてパラアスリートを見ていただけるよう頑張っていきますので、これからも応援をよろしくをお願いします。



練習中の川原選手





interview

車いすテニス男子シングルス決勝で戦う国枝選手

提供：Bob Martin / IOC / OIS / アフロ

## 車いすテニス くにえだしんご 国枝慎吾選手

# 諦めないで一日一日力を尽くすことが 夢につながる

——シングルスでの金メダル獲得おめでとうございます。今回のパラリンピックでは、日本選手団主将として出場されましたが、どのような心境で大会に臨まれましたか。

**国枝選手** 主将として自分の活躍で引っ張っていきたいという気持ちは当然ありましたし、逆に言えば早期に敗退するわけにはいかないというプレッシャーもありました。また、自分自身のキャリアがおそらく終盤に差し掛かっているところで、こうして日本でパラリンピックが開催されるという奇跡的なめぐり合わせがあり、その大舞台へ臨

む気持ちは、それまでの大会とは比べものになりませんでした。最後の最後までちょっとハイな状態でプレーできたのは、ホームの力があったからだと思います。

——「俺は最強だ」という言葉を座右の銘とされているということですが、どのような思いでその言葉を選んだのでしょうか。

**国枝選手** 僕が世界10位だった2006年に、アン・クインさんというオーストラリアの有名なメンタルトレーナーからカウンセリングを受けたのがきっかけでした。僕がナンバーワンになりたいと言



ったら、「なりたい」ではなくて自分自身が「ナンバーワンだ」と断言するトレーニングから始めましょうと。

——最初にその話を聞いたとき、そのような方法で大丈夫なのかと思いませんでしたか。

**国枝選手** 当然半信半疑でしたが、何事もやってみないとわからないだろうと思いました。朝起きて鏡の前で「俺は最強だ」と自分に言って、ラケットに貼ったりもしました。世界10位だった僕が3カ月くらいでグランドスラムのタイトルを獲得して世界ランキング1位になったのは、メンタルがプレーに及ぼす影響がこれだけ大きいのかということを感じた瞬間でした。

——「ナンバーワン」ではなく「最強だ」としたことには何か意味があるのですか。

**国枝選手** アン・クインさんから、気持ちが乗りやすいものを選び、自分でどんどん変えていきなさいというアドバイスから言葉を選びました。

——人間どうしても弱気になりますが、その言葉だけで乗り切れるものですか。

**国枝選手** 当然、裏づけが必要です。例えば風邪をひいて休んでいたのに「俺は最強だ」と言ってもプレーに表れないですし、裏でどれだけやっているかということが自信になるからこそ力になるのだと思います。

——けがなどの困難にぶつかったとき、どのようにして乗り越えてきましたか。

**国枝選手** トレーナーやドクター、妻の支えもありますし、自分自身でもどうしたらけがをしないように打てるのかと、人体の構造を研究したりも

しました。

——パラスポーツの発展のためにどのような取り組みが必要だと思いますか。

**国枝選手** 選手自身が技術や力を見せることで興味を持ってもらえるコンテンツにしていかないと継続しません。見る人の想像を超えるプレーが競技の盛り上がりにつながると思います。

——国枝選手にとって車いすテニスの魅力、難しさはどのようなところでしょうか。

**国枝選手** ショットと車いすの操作という両方のテクニックが必要というところが魅力だと思います。一方で、健常者がサイドステップを踏めるところで車いすではターンしないと横に動けないので、相手から目を離さなければなりません。そういったところが難しさです。

——テニスは健常者と戦えるスポーツですね。

**国枝選手** そうですね。僕は1年間のうち8割くらい健常者とプレーしていて、本当に健常者と障害者の垣根が低い競技だと思います。ルールもツーバウンドまでの返球が許されるというところ以外変わりませんし、トップになればなるほどツーバウンドで取ることも少なくなります。僕も7、8割くらいはワンバウンドもしくはノーバウンドです。

——最後に、ご自身の経験を踏まえて、子どもたちにメッセージをお願いします。

**国枝選手** やはり日々の積み重ねで世界1位になり、こうしてパラリンピックのチャンピオンになることができました。諦めないで一日一日とにかく力を尽くすことが夢につながると思います。



笑顔でインタビューに応える国枝選手



日本国旗を手にガッツポーズ

©ロイター/アフロ



interview

バドミントン女子シングルスと女子ダブルスで金メダルを獲得した里見選手

©松尾/アフロスポーツ

## バドミントン

さとみ さりな

すぎの あきこ

むらやまひろし

# 里見紗李奈選手、杉野明子選手、村山浩選手

## 新たな出会いが人生を変える

——バドミントンは東京2020大会でパラリンピックに初めて採用されましたが、日本代表で合わせて、金3個、銀1個、銅5個、計9個のメダルを獲得するという素晴らしい成績でした。

**村山選手** 私はシングルスでは4位入賞でしたが、ダブルスでは梶原大暉選手と組んで銅メダルを獲得することができました。

**杉野選手** 私はシングルスと混合ダブルスで、どちらも銅メダルでした。パラリンピックが日本で開催されたことによって、テレビを通してでしたが、実際にプレーを見ていただくことができ、「見たよ」「よかったね」という言葉をたくさんいただきました。3年後のパリ大会に向けて、ここからまたスタートしていきたくと思っています。

**里見選手** 私はシングルスとダブルスの両方で金メダルを獲ることができました。今回コロナ禍で大会が開催されたこと自体が嬉しいことでしたし、パラリンピックの舞台に立てたことも金メダルを2つ獲ることができたことも、とても嬉しく思っています。

東京パラリンピックはパラバドミントンを知ってもらえるチャンスだと思っていたので、「パラバドミントンっておもしろいな」「こんなスポーツがあったのか」といった書き込みをネットで見つけると、知ってもらえるきっかけを作れたなと思いました。パリに向けて引き続き頑張っていきたいです。

——村山選手はパラバドミントン界のパイオニア





女子シングルスと混合ダブルスで銅メダルを獲得した杉野選手

© アフロスポーツ



男子ダブルスで銅メダルを獲得した村山選手

© アフロスポーツ

的な存在ですが、長らく活動されてきて、ここまでの活動を振り返っていかがですか。

**村山選手** 私はパイオニアでも何でもなくて、ただ自分でチームを作って体育館の予約をしているだけですが、34歳のとき病気で障害を負っているいろいろなことができなくなり、会社も辞めざるを得なくなりました。私は今47歳ですが、近所に

千葉県障害者スポーツ・レクリエーションセンター（千葉市）があり、バドミントンと出会ったことで新たな目標を持つことができましたし、やはりバドミントンがあったからこそ人生の幅が大きく広がったと心から思っています。

この競技や応援してくれている方々に恩返しをしたいと思ってきた中で、東京パラリンピックの



本番会場となる国立代々木競技場第一体育館を使っ  
た練習風景（東京都渋谷区）

左上：杉野選手、右上：村山選手、右下：里見選手

出場権をつかみ、銅メダルを獲得できたことは、目標を持って臨んできた結果だと思っています。

当初、車いすバドミントンの競技人口は少なかったのですが、自身の競技力を上げながら、競技人口を増やしたいと思って普及活動を続け、県の協力もあり、だんだん競技人口が増えてきました。その中の一人が里見選手で、初代女王として2つの金メダル獲得を成し遂げてくれたというのは本当にすごく嬉しく思います。パラバドミントンには6つのカテゴリーがありますが、全体としてはまだ競技人口が少ないので今回パラバドミントンの認知度が上がったことを活かし、自身の競技力向上だけでなく、普及など色々と活動していきたいです。

——杉野選手が競技を始めたきっかけは何でしょ

うか。

**杉野選手** 千葉県障害者バドミントンチームの代表が普及活動の一環で私のいた中学校に来られて、誘いを受けたのがきっかけです。

——試合で苦しい展開のときは、どのように自分を奮い立たせていますか。

**杉野選手** 今大会は無観客だったということもあって、コートでの声がテレビの前でも聞こえていたのではないかと思います。私はリードしている場面でも、負けている場面でも、「大丈夫、大丈夫」「次取れば大丈夫だから」と常に同じトーンですっと自分に言い聞かせていました。苦しい場面では応援してくださっている人たちの顔が浮かぶものだという話を聞いていましたが、それは本当で、ここまで応援してくれてありがとうという気持ち





バドミントンで金メダル3個、銀メダル1個、銅メダル5個のメダルを獲得した8人のメダリスト  
前列左から2番目が里見選手、右から1番目が村山選手、後列右から2番目が杉野選手

©アフロスポーツ

も自分を後押ししてくれて、気持ちが引かずに押して行けたので、勝てたのではないかと思います。

**里見選手** 私も苦しい場面では声を出して自分を鼓舞して気持ちを盛り上げていこうとしていました。パラリンピックでは頭の切り替えもスムーズにできて、ここを落としても大丈夫だと思うことが次の展開につながったのではないかと思います。——里見さんは世界ランキング1位の選手として注目されていましたが、プレッシャーを楽しめるほうですか。

**里見選手** 取材でプレッシャーについて聞かれたときには、ないと答えましたが、考えていると夜中に足が震えるような感じになりました。世界ランキング1位、第1シードだと言われるのは気持ちがよくて、嬉しい部分ではありましたが、やはり結果を残さなければという気持ちもあり、結果を残せて本当にほっとしました。

交通事故で車いすになった後、父に連れられて村山選手のクラブで競技を始めたころは、趣味程度の気持ちでしたが、パラバドミントンに出会って人生が本当に変わりました。このように一歩踏み出して何かを始めてくれる人が増えれば嬉しいなと思います。

——応援してきた県民の皆さんへのメッセージを

お願いします。

**里見選手** 私は応援がプレーに影響するので、本当なら沢山の方々に会場でバドミントンを観ていただきたかったですが、コート脇にいらっしゃるメディアの方のカメラの向こうで皆さんが応援してくれていると思うだけですごく力になりました。本当にありがとうございました。

**杉野選手** たくさんの応援のおかげで、いま自分がここに立っているのだと思っています。実際にプレーを見ていただくことはできませんでしたが、メディアを通してパラリンピックを見ていただくことができ、今まで知らなかった人にも知ってもらえたというのが嬉しいことだと思います。私は生まれも育ちも千葉県で、本当に地元の力がパワーになりました。今後も頑張っていきたいと思っていますので、引き続き応援をよろしく願います。

**村山選手** もう感謝しかありません。会場は代々木で千葉県ではありませんでしたが、本当にたくさんの人から応援や激励のメッセージをいただいて、震えるくらい嬉しかったです。苦しい局面でも応援が背中をぐっと押してくれていました。また、パリ大会を目指して頑張りますので、応援のほどよろしく願います。